



ロータリーの魅力について

国際ロータリー第2620地区

ガバナー 牧田 静二

はじめに

「ロータリーとは何か」、「ロータリーの魅力」について考えてみたいと思います。

かつて、ポール・ハリスはロータリーとは何かと質問されて「この質問を何千人かのロータリアンにしたら、何千通りもの答えが返ってくるだろう（ロータリーはそうした多様性が尊重されている）」と答えたという有名な話がありますが、全くその通りだろうと思います。しかし、私にとってこの問題はロータリークラブに入会して38年間ずっと考え続けてきた問題であり、殊に昨年7月、ガバナーに就任して地区内81クラブを公式訪問し、会員増強を訴えるうえで避けては通れない問題として、いろいろと考えることも多かったのは事実です。しかし、私の愚鈍な頭脳では未だ明解な結論には至っていないのですが、この問題について私の感想を率直に披瀝して大方の会員のご批判を仰ぎたいと思います。

ロータリーの魅力 その1. ロータリーの精神・哲学

私にとってロータリーの魅力の第1は、やっぱりその精神、哲学にあると思います。ガバナー月信5月号に「ロータリーと職業奉仕の思想」を書きましたから詳細はそれに譲りたいと思いますが、近代資本主義社会を産み出す精神的原動力となったプロテスタント達の持っていた宗教上の倫理観、職業観、それを初期のロータリークラブに集まったポール・ハリス達がいち早く取り上げ、これを新しくスタートしたクラブの綱領に採用したこと、これが大成功でロータリークラブはその後たちまちのうちに全米に広がり、やがて全世界に拡大して行ったこと、彼等が信奉した勤勉、節約等の宗教的戒律を伴う禁欲的合理主義＝プロテスタンティズムの倫理は独自の職業観を持ち、職業は生活費を稼いだり、利潤を得るためにあるのではない「天職」として神から与えられた社会に奉仕するための手段である。従って職業の倫理性、道徳性を高めなければならないという考え方が、当時のエリート層を構成していた実業家や医師、弁護士等の専門的職業人の熱狂的な支持を受け、これがロータリー運動を全世界に広める原動力となったのです。

今日ではロータリーが創立されてから百年以上が経過し、その運動の方向性や重点がずいぶん変貌しましたが、この「職業奉仕の思想」は脈々と受け継がれ、特に日本ではその信奉者が多く、ロータリーの魅力となっているのです。

ロータリーの魅力 その2. 豊かな人間関係

ロータリーの魅力の第2は、その豊かな人間関係の構築にあると思います。断わっておきますが、私はロータリーを単なるボランティア運動とする考えは反対です。少し大袈裟に云えば、私はロータリーは人間形成の場、人間の生き方

を教えてくれる教室と考えているひとりです。

ロータリークラブはさまざまな職業の人の集まりです。そうした異業種交流の場ということ以上にロータリーでなければ出会うことのできなかった優れた先輩、友人との交際を通じて私は大切なことを学んできたと思います。ロータリーで得られた人間関係は私の貴重な財産であったと思います。ただ、こうした人間関係はロータリーに長く在籍したからといって得られるものではありません。奉仕活動にせよ親睦活動にせよ共に汗を流して苦楽を共にして初めてえられるものだと思います。これがロータリーの第2の魅力であろうと思います。

ロータリーの魅力 その3. 自利に先立つ奉仕活動

ロータリーの奉仕活動そのものを三番目の魅力とすることは順序が違うとお叱りを受けそうですが、RIが全世界で展開する奉仕活動、個々のロータリークラブが地域で行う奉仕活動、それらがロータリーの魅力であることは間違いありません。私は昨年1月、国際協議会、6月、国際大会とアメリカで開催された2つのビックイベントに参加しました。その都度思ったのですが、ロータリーとは世界のさまざまな民族と人種を結集した巨大組織であることを今さらながら認識しました。ロータリーの持つこうした巨大パワーは国際的な大会に参加して初めて判るように思いました。

ポリオ問題についても、その運動の進め方に問題はありますが、この地球上からポリオウイルスを撲滅するという人類の崇高な夢を賭けたすばらしい運動であると思います。本当に微力ながらそうした運動の一翼を担うこともロータリーの魅力ではないでしょうか。

R財団、米山記念奨学生への援助等々ロータリーの行うすばらしい事業は私たちの誇りであり魅力であると思います。

かつて、私の尊敬する高橋 堯昭パストガバナーはロータリーを濁世（じよくせ）という泥田に咲いたハスの花のようだと表現されましたが、私も全く同感です。この世智辛い世に誰に強制されたわけでもないのに自前のお金と時間を使って他人への奉仕を考える人々の存在は貴重だと思うのです。

本来、資本主義を興した精神には富の追求を目的として暴利を貪ってはならず、得られた利益を個人的に浪費したり投機に走ってはならないという節度、倫理が求められていたはずですが。また社会的にも資本家や権力者がこの節度を失って民衆の反感を買えば革命が起きるかも知れないという社会的なタガが存在しました。ところがベルリンの壁の崩壊以降、資本主義は共産主義という恐ろしいライバルを失い、同時にこの社会的なタガも喪失してしまいました。残されたのは“儲けて何が悪い”という例のホリエモン流のむき出しの金銭欲と強欲資本主義です。その強欲資本主義も破綻してしまった今日、われわれはかつて資本主義を勃興させた精神に回帰せざるを得ないのではないのでしょうか。

“自利に先立って他利がある”ことを認め、いわゆる「超我的奉仕」のロータリー精神が見直さるべき時代が到来したように思うのです。

私はロータリーの会員が増加し、ロータリーの精神が普及することが取りも直さずこの社会を良くする道であることを信じてこの一年間努力して参りました。日暮れて道遠しの感がありますがこれからも努力を続けることをお約束して擲筆します。